

Borneo Jungle School 2002

館長のことば

ジャングルスクールが

教えてくれたこと



スクール生に囲まれて少年時代を語る(第3回)

ジャングルというと、「ターザン」という言葉がまるで合言葉のように出てくる人が多いのではないのでしょうか。そこは猛獣毒蛇の住処でサソリや毒虫がうようよしており、ぎっしり残った濃密なつたや樹木の壁に阻まれて、歩くこともできない秘境だ、という印象が一般的には強いようです。こんな所へ子どもを連れて行って体験学習をするとは、なんとという無謀な計画だと、当初は批判されました。しかし、これはジャングル(熱帯雨林)に対する誤解から発しており、ジャングルの実態を正確に知り、慎重な計画の下に行くと危険なことはありません。幸

い5年間無事連続して実行することができ、しかも所期の目的通り大変大きな成果をあげることができました。

あえてボルネオの原生林に挑戦した理由は四つあります。

1) 子どもの自然ばなれがはげしい。子どもの健全な成長のためには、自然に親しみをもち、自然の中であそぶことが必要です。「いのちの尊さ」を子どもに教える大切さが叫ばれていますが、それは自然と深くかかわることによって、おのずから体験することができるのです。子どもがもっている野生の力を呼び起こし、たくましさを身につけ、危険に対する自己責任感を養い、また、美意識を高めるなど、自然を受好することによって多くのことを学ぶことができるでしょう。

2) 自然が内包する不思議や驚き、神秘性を知り、深い感動をうるとともに好奇心を高揚し、自然の秘密に分け入る探究心を養うこと。科学する心の扉が開かれ、自ら考え問題を解く楽しさを知ることができます。熱帯雨林とはどういう森かということも、体験を通じて知ることができるでしょう。

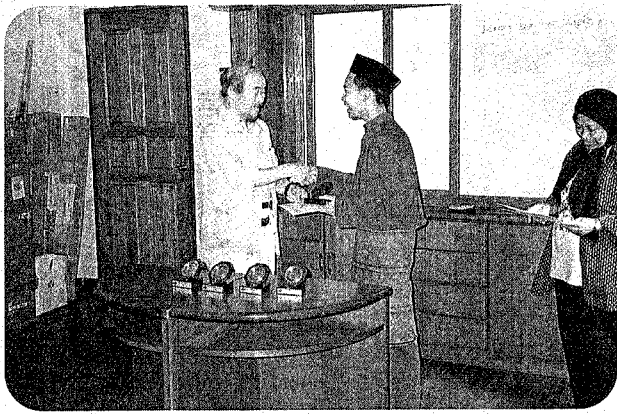
3) 四班に分かれ、男女混合の異年齢集団を作り、自律的な活動を行う。少年時代に失われた異年齢のあそびグループを経験させ、社会性を養う。

4) マレーシアの中高校生8人が合流し、共同生活をする。これによって異文化体験を共有し、国際感覚を涵養する。

大変欲ばった目的ですが、驚いたことには、わずか8日間のジャングル体験旅行が、じつに有効で、上記の四つの目的を見事に達成することができました。ほとんどの親が、ジャングルスクール体験によって、「子どもが変わった」と言います。「変わった」という



標高約90mのキャノピーウォーク(第3回)



サイエンススクール生に修了証と記念楯を授与(第3回)

内容は、「たくましくなった」が一番多く、「自主性が出てきた」「よく喋るようになった」「自然への理解が深まった」など建設的な感想がよせられたのは大変うれしく思いました。

わずか8日間のジャングルツアーが、これほどまで子どもに大きな影響を及ぼすとは驚異的であるとともに、自然体験がどんなに大切かということを変更して教えてくれました。子どもが自然ばなれを起こしているのは、子どもの責任ではありません。時代が、大人が、子どもから自然を取り上げてしまったのが、大きな原因です。今、子どもの教育に緊急に

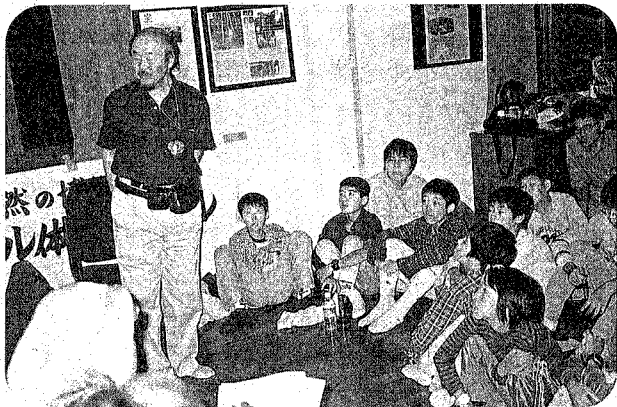
求められていることは、子どもたちに積極的に自然を取り戻す方策を考え、どんどん実行することです。この教えは、ジャングルスクールが私たちにくれた最高の贈り物です。この贈り物を、これからも子どもたちに積極的に与えていきたいと思えます。

ジャングル体験スクールが成功したのは、別格の好条件に恵まれたからです。当博物館はマレーシア国立サバ大学と研究協定を締結しているのです。サバ大学がジャングルスクールの実行に全面的に援助をして下さいました。サバ大学熱帯生物保全研究所長のマリアッティ博士と大学院生が、子どもたちに現地指導をして下さった熱意には感激の他ありません。オスマン学長は直接子どもたちに修了の楯を手渡し、昼食パーティーに招待して下さいました。「子どもの教育に深い関心をもつのは、大学人の使命の一つである」という言葉には感動しました。日本の大学の学長にこれだけの見識と行動力をもった人は何人いるでしょうか。

ラハダトゥ・サイエンススクールの校長先生以下、学校をあげての心のこもった歓迎も忘れることができません。ヤヤサンサバ財団元JICAの生物学者の安間繁樹さん、サバネイチャークラブの主任保護官のジミー・オマルさんにも御礼申し上げます。日本児童教育振興財団、総合教育研究財団、こども教育支援財団には多額の資金援助を頂きました。心から感謝を捧げる次第です。

兵庫県立人と自然の博物館館長

ボルネオ・ジャングル体験スクール校長 河合雅雄



観察発表会での講評(第4回)



熱帯雨林と生態系についてレクチャー(第3回)